

「世俗的批評」・「弁証法」・「原爆文学」

——文学史記述とカタストロフをめぐる覚え書き

柳瀬善治

はじめに

本稿は、「日本版『ミメーシス』(エーリッヒ・アウエルバッハ)は可能か」「世俗的批評(エドワード・W・サイード)を成す存立機制は何か」という作業仮説のもとにこれまでの日本文学史記述の方法意識を再検証し、さらにその問いを日本思想史における「弁証法的思惟」の問題へと敷衍することで、比較文学論・比較思想史的な観点から日本文学史を再評価することを目的とする。

次に、英語圏の同時代の文学・哲学(弁証法に対して批判的な分析哲学等)の研究状況の再構成とそうした状況の日本との対応関係を検証する。さらに、そうした弁証法的体系に包含できない外部としての「アジア」「核」をどのように表象するかという問いを「弁証法の外部」「中動態」という観点から問い直す。

一 アウエルバッハ『ミメーシス』という視座

——サイードと弁証法——

『ミメーシス』はアウエルバッハにより一九四六年に出版された(ドイツ語版)著作である。同書はヨーロッパの文学の歴史を「ミメーシス」(模倣)による現実の解釈」ととらえ、リアリズムの概念が古典作品から近代にいたるまでいかに変容したかが詳細に論じられたものであり、そこでの「ギリシヤ的なもの(水平的)」と「ヘブライ的なもの(垂直的)」の弁証法的な思考法の萌芽の指摘は、第二次世界大戦前後の著名な批評家、例えばジェルジ・ルカーチ『歴史と階級意識』やジャン＝ポール・サルトルの仕事に先立つ。同書の影響は二〇世紀後半から現在の批評家にまで及ぶものであり、日本では篠田一士らによる紹介がありフレドリック・ジエムソン(イェール大でアウエルバッハの指導を受ける)、エドワード・W・サイードにも深く影響を与えている。サイードの「世俗

的批評」の概念はアウエルバッハの著作への考察に立脚しており（『世界・テキスト・批評家』序章）、いわばアウエルバッハはポストモダン、ポストコロニアリズムの靈感源の一つであると言える。

本稿は、この『ミメーシス』での問い（リアリズム概念と弁証法）、およびアウエルバッハを受けたサイドの問い（世俗的批評——既存の文学的制度の外側に批評的根拠を探ろうとする試み）を受け、「日本版『ミメーシス』（日本思想における弁証法的思惟）は可能か」「世俗的批評を成す存立機制は何か」という視座から日本文学史・日本思想史の可能性を問い直すものとするものである⁽¹⁾。

私は博士論文で日本近代文学におけるロマンティズムの問題を取り扱い、ロマンティズムが日本の文学史記述において一種の記述戦略として使用されていることを論証し、その際に文学史記述の戦略性に関心を持った。その後、江藤淳や吉本隆明らの文学理論を検証し、文学史記述の問題を原理的に考察するという作業を継続してきた⁽²⁾。

日本思想史を弁証法的思惟で考察した仕事としてはかつての丸山眞男『日本政治思想史研究』や家永三郎『田辺元の思想史的研究』『日本思想史における否定の論理の発達』などの著作があるが、日本文学史をそうした視座で考察したものはかつてのヘーゲル・マルクス主義的な著作（吉本隆明『言語にとって美とは何か』など）に限定され、本稿のような比較文明論・比較思想史的な観点の研究はない。また、リアリズム概念が自然主義や私小説との関連からのみ検証され、その思想的強度や歴史的必然性を問わずに来た従来の日本文学研究を問い直すという点でも本稿での視座は重要である⁽³⁾。

本稿は日本の文芸批評家の仕事も検証の対象としているが、これはサイドの「世俗的批評」が日本の文芸批評と研究にどのように見いだせるのかを問い直すためである⁽⁴⁾。

さらに本稿はエドワード・サイドの仕事のアウエルバッハから逆算して再考するという試みでもある。「世俗的批評」については、先に見たようにサイド自身による「世俗批評」（『世界・テキスト・批評家』）があり、そこでサイドはアウエルバッハの『ミメーシス』後記にふれながらヨーロッパの文学的伝統から離れた場所で思考したアウエルバッハの営みを再評価している⁽⁵⁾。

この「世俗的批評」を可能にする「場所」とは単にアカデミズムから離れた在野に身を置くというだけではない。それは世俗的なものに身を浸しながらそこから同時に批評的距離をいかにして維持するかという緊張感に満ちたものである。

近年ではサイドの高弟ゴウリ・ヴィシユワナータンの『異議申し立てとしての宗教』で「世俗的批評」を「既存の諸原理への異議申し立てを、本質的には、宗教的権威への抵抗と同型である」とみなす発想⁽⁶⁾ととらえたうえで、宗教的批評、ことに「改宗」に関する分析へと応用した研究がある⁽⁶⁾。この「世俗的批評」の再検証はキリスト教の異端の議論を日本思想史に応用した前述の藤田『異端論断章』の再評価にもつながりうる。事実、ヴィシユワナータンは同書で「異端」の問題に触れている。サイドがモダニズム文学の背後に社会的諸関係の変化、「血縁的関係」(filiation 親子関係など)から「養子縁組関係」(affiliation 家族とは違う横断的なつながりであり物象化された関係⁽⁷⁾)の変化を見ている点は、アウエルバッハの『ミメーシス』でのヴァージニア・ウル

フ評価を社会関係の観点から評価をし直しているともいえる。

私は前述した問題関心から、『ミメーシス』をはじめとする欧米の文学史記述に詳しい齋藤一と二〇一五年頃より日本の批評家や研究者の仕事について継続的に議論を重ねてきた。齋藤は私の問題提起を受け、ヴァージニア・ウルフ協会での研究発表において中動態論からのアウエルバツハ再評価の検証を行っている⁽⁸⁾。

さらに、ダマソ・フェレイロ・ポッセによる芥川龍之介研究が芥川のギリシャ文学受容について実証的に明らかにした⁽⁹⁾。ダマソの研究は『神々の微笑』（一九二二）での芥川の『オデュッセイ』受容に関するものであり、芥川の『オデュッセイ』受容が『ミメーシス』第一章の議論と接続しうるものがこれにより判明した。ここから日本版『ミメーシス』の萌芽が（アウエルバツハの仕事の二〇年前に）大正期の芥川の仕事に内包されていたことが明らかとなった。大正期には野上弥生子がギリシャ悲劇を独自に受容しており、芥川がこの当時日本の神話を主題とした作品『素戔嗚尊』（一九二〇）を発表していたことも合わせ、この観点は追及されるべきであろう。

これらの研究との接点から日本近代文学史を比較文学的視座から検証し、新たな文学史的記述へと展望する視座が開けた⁽¹⁰⁾。

本稿の視座はかつてのヘーゲル・マルクス主義的な文学・思想史研究への再検討の意味合いも持ち、それは芥川に胚胎した（もう一つのミメーシス）の可能性を問うものでもある。

二 日本文学史・日本思想史記述におけるヘーゲルの思惟の試み

では、具体的に日本文学史・日本思想史記述における弁証法をはじめとしたヘーゲルの思惟の展開を見ていく。

複数の外国語訳があり海外でも知られる加藤周一『日本文学史序説』（一九七三―一九七五）は、日本文学の歴史的展開の特徴として①文化全体の中の文学の役割、②その歴史的発展の型、③言語とその表記法、④文学の社会的背景、⑤世界観的背景を挙げている。加藤は、「具体的・非体系的・感情的な人生の特殊な場面に即して、言葉を用いることにあつた」思想の「日本化」を「包括的体系の分解」（p.13）としたのち、「新旧が交替するのではなく、新が旧に付け加えられる」「どれ一つとして後から来た形式のなかに吸収されて消え去つたものはない」（p.25）と述べ、型の交替の不在、すなわち弁証法的思考の不在を読み取っている。加藤はそうした発展の型が成立した理由として「言語的・社会的・世界観的背景にあらわれたある種の「二重構造」（p.26）をあげており、日本の和語と漢語の「二か国語併用」||「二重構造」をその言語的背景であると指摘している⁽¹²⁾。

加藤の論での指摘として、『竹取物語』の構成の完成度を称賛しその後継作品が現れなかったこと、『土佐日記』にその後の平安文学だけでなく遠く私小説の先駆（作者の日常的経験を記録し、そこに抒情的な「さわり」を設ける）を見ていること、平安期の文人たちが実証的な態度と私生活の崇高化を両立させ、なおかつそこに中国文学とは違う社会的無関心が含まれていたこと（これも私小説の先駆であるとみなせなくてはならない）があげられる。

また仏教をめぐる議論としては鎌倉時代の到来と仏教の武士階級への普及が平安期の貴族社会を崩壊させつつ、そこにある種の「歴史意識」——「原因結果の連鎖として過去を記述すること」——を発生させ、それが十三世紀の平家物語へとつながっていること、道元の『正法眼蔵』に体験の直接性を表象する母国語と客体化の概念的道具としての外国語の緊張関係が存在することなどが指摘されている。これも先に見た言語の二重使用という把握に基づく議論であり、道元や富永仲基などの例外を除き、日本文学史及び思想史においては弁証法的な思考法と批評性が発生しなかつたと加藤は理解している。

この問題を柄谷行人が『日本精神分析』⁽¹³⁾で論じた論点を援用して説明すれば、日本の漢字仮名交じり文は、外来思想が内在化されることなく、表層に温存されたまま残り続ける「漢字仮名交じり文」という「制度」の産物として、言語秩序という他者に直面することなく主体形成が行われるため、「日本語」及び「日本人」には複数の意味の抗争による批評性が発生せず、内面的な美学性のみが発生するということである。⁽¹⁴⁾

外来的な観念は、所詮漢字やカタカナとして表記上区別される以上、恐れる必要はない。それらは本質的に内面化されることもなく、またそれに対する抵抗もない。⁽¹⁵⁾

ここから見たとき、柄谷の議論もまた日本における弁証法的思考の不在を問題化していること、そして、その問いは柄谷の言う「他者」の不在という問いに集約されることがわかる。付け加え

ておくならば、柄谷が『日本精神分析』で例に出しているのはダマソが論じた『神々の微笑』である。⁽¹⁶⁾

加藤の仕事について、芳賀徹は津田左右吉の『文学に現れたる我が国民思想の研究』をその先駆として挙げているが、⁽¹⁷⁾後述の家永三郎が弁証法的な視座で日本思想史を論じ（『日本思想史における否定の論理の発達』）、田辺元および津田左右吉の思想をトータルに検証していることをふまえれば、⁽¹⁸⁾明治期からの日本文学史、日本思想史を本研究の視座で改めて検証する必要がある。

古代から現代までの文学史を総覧した数少ない試みの一つである小西甚一『日本文藝史』（一九八五—一九九二）は日本の文芸の特質として「対立性が鋭く現れない」点をあげ、以下の五つの点を挙げている。①構成における対立者の欠如、②自然と人間との隔てなさ、③階級がジャンルに対する関わりの非在、④個人と集団との協調傾向、⑤製作者ないし演奏者との相依関係。

そのいずれにおいても明確な対立性が現れないため、『ミメーシス』でアウエルバツハが論じたような自然を対象化した描写と神話的世界の対立は成立しない。また描写性においても、他ならぬアウエルバツハに言及しながら小西自身が触れているように、俳句という極小の形式の文学に至る日本文学の歴史は無限に増殖する可能性を持つヨーロッパの文学の描写（の弁証法的展開）と相容れないものを含むとされる。⁽¹⁹⁾

『日本文藝史』では、「永遠」を目指し完結性を尊ぶ「雅」と通俗さゆえに無限への志向を持つ「俗」、両者の混淆である「雅俗」（俳諧など）を分類概念として分析が進み、小説は江戸時代のそれも含み「雅俗」の系列として位置づけられる。⁽²⁰⁾加藤の研

究ではあまり触れられていない近代以降の詩歌や戯曲にも目を配り、中国文学史への深い造詣をもとに漢詩文との比較や東アジア全体のなかで日本文学を位置づけようとする姿勢が小西の研究の特徴である。

江藤淳の『作家は行動する』（一九五九）は「行動」と「文体」とを接続しようとした試みである。

自己否定によって現実を包括しえたとき、その瞬間に全体の有機的な部分としての「個性」が確立される。それは自己充足的ではなく、全く機能的な、つねに全体との動的な関係において存在する個性である。⁽²¹⁾

「小説の文体」を確立することは、ことばによる行動を通じて、いつさいのことばの拘束を抹殺することである。そして行動は、すでにくりかえして強調してきたように、たとえば「現在」の自己否定から生じる。こうして、このことは、最終的には、否定運動を完結したときに、はじめてもつとも大きな「肯定」―すべての現在に生き、行動し、存在しているものたちへの讃歌が生まれるということを意味するのである。⁽²²⁾

このように述べた江藤は、小説は「静的な自己主張を行う個性の否定」をめざす「文体」で描かれた、「構造を明瞭に露呈した現実」を「表現」するものでなければならぬとし、そのような「表現」としての「作品」を読むことで読者は「行動」に参加し

うるのだとする。⁽²³⁾

こうした江藤の立論に対し、同時代に菅野昭正による批判がある。⁽²⁴⁾菅野は江藤の論理における用語法の曖昧さと混乱、状況論と原理論の混淆、文学と社会的価値との「単純連続説」を厳しく批判したうえで、そこに文明批判的な批評に必要な「未来像の設計への主体的な衝動」が欠落していること、「伝達」を「表現上の問題」にのみ限定し「人間相互の関係でどこまで可能か」という「倫理の根本的な問題としての側面」(p104)を捨象していること、そうした「機能的散文論」が、「言語の彼方」という言語の「対象を遠ざけて不在を保持する機能、可動的な第二の機能」(p108)を議論に導入した時点で破綻していること、そうしたすべての矛盾が彼の「行動」概念の多義性に集約的に現れていることを指摘している。⁽²⁵⁾

事実、後述のケネス・バークと比較した場合、菅野のいう「人間相互の関係でどこまで可能か」という「倫理の根本的な問題としての側面」「未来像の設計への主体的な衝動」は、バークの理論においては象徴的行動の概念とギリシャ哲学をはじめとする哲学的素養に基づいた語源学や弁証法などの理論の吟味により担保されており、江藤の論はバークの仕事と比べた場合、議論の緻密さと知的背景の幅広さが足りないことは否めない。以前拙稿で論じたように⁽²⁶⁾「表現」の概念が厳密でないことも合わせ、江藤の「行動」と「文体」を接続した論は理論的に十分なものではない。

ただ、江藤が日本における「散文」の例として福沢諭吉と内村鑑三を例に挙げ、そこに「動的な自己否定」と「すでにある文学

的な規範や美学に対する否定」を見て取り、さらにその延長線上に夏目漱石の文体を位置づけていること、そして漱石の根底に「根源的な「存在」への不安」を読み取っていること、そこから『リアリズムの源流』における「他者と社会に開かれたもの」を表象する文学史への視座が導かれていることは付け加えておくべきだろう。⁽²⁷⁾

弁証法的な論理で文学史を記述しようとした試みとして吉本隆明の名は逸することができない。初期の『マチウ書試論』で吉本は「ローマ的な秩序」と「ヘブライ聖書」の相克、そして其処から切断された存在としてキリストを描き出し、かつ、そのキリストという（虚構）（吉本の種本は新約聖書を偽書としたドレウスの『キリスト神話』）を中心にして原始キリスト教の権力の生成過程（それを支える「一種のするどい観念的な二元論」）を見ている。⁽²⁸⁾こうした原理的把握を立脚点とし、『言語にとつて美とは何か』での自己表出と指示表出による「表現転移論」に結実した吉本の仕事は、「ギリシア的なもの」と「ヘブライ的なもの」の弁証法からヨーロッパのリアリズム文学の生成と変容を論じたアウエルバッハ『ミメーシス』に日本で最も接近した試みととらえることが出来る。

『ミメーシス』の描写の問題は『言語にとつて美とは何か』においては「指示表出」に対応するが、「自己表出」と「指示表出」との関係はいわゆる弁証法に回収されないねじれを持っている。合田正人が指摘するように、吉本はこの二種類の表出の関係に「網目」「縫目」という表現を使っており、吉本についてはむしろヘーゲル弁証法にハイデガールの（あるいはデリダ的な）屈曲を加えた

田辺元と比較したほうが適切である。⁽²⁹⁾ 加藤、小西が日本における思想的対立の不在を問題化しているのに対し、吉本はあえてそこに力の交錯を読み取ろうとしている点に特色がある。

吉本には「大衆の原像」概念があるが、これは安易な代行Ⅱ表象論を前提にしているのではなく、「これをどんなに汲み取ろうとしても、手の指からこぼれおちてしまうもの」⁽³⁰⁾つまりは表象や理論に還元できない抵抗性をもった概念として設定されている。合田は吉本の「原像」を「主観によつて不可避的に補正され無化される以前の」「このような処理に抵抗する曖昧さと複雑さの痕跡」と解釈している。⁽³¹⁾ こうした複雑性を持った概念をサイドの「世俗的批評」と比較することで新たな読解の可能性が開きうるだろう。それは暗黙に「日本人同士」であることを前提にしている吉本の「大衆」論にポストコロニアル的な陰影を付け加えることでもある。

日本思想史でのヘーゲル的な歴史記述については、前述の丸山真男『日本政治思想史研究』、家永三郎『田辺元の研究』、『日本思想史における否定の論理の発達』などが著名な著作として挙げられる。

丸山についてはすでに多くの研究があるが、⁽³²⁾ 近年の研究として今井弘道の研究があり、今井は丸山の「政治学に於ける国家の概念」（一九三六）における「弁証法的な全体主義」における田辺元の影響を指摘し、その概念を起点として丸山の江戸思想史研究や戦後の著作を総覧して論じている。⁽³³⁾

興味深いのは、今井が野口武彦『王道と革命の間』⁽³⁴⁾での吉田

松陰解釈に触発される形で、丸山の戦時下に書かれた吉田松陰論に「緊急権国家論」「国民戦争」への問いを読み取っている点である。

一九七六年から一九八三年といういわゆるポストモダンの季節に連載された野口のこの著作は「孟子問題」、具体的には「易姓革命」についての解釈を江戸思想史を総覧しつつ、そこでのいわば「弁証法的展開」を位置づける（最終章で論じられるのは北一輝と三島由紀夫である）という点で本稿の問いにも合致する仕事である。

家永についてまず特筆すべきは、家永が『日本思想史における否定の論理の発達』で指摘しているのが鎌倉時代の新仏教が古代の肯定的な精神にもとづく思考に対し否定的な世界観を突き付けたという点であり、家永はその問いを田辺哲学の検証においても貫いている。⁽³⁵⁾

丸山との共同研究として書かれた著作として藤田省三『異端論序説』があり、藤田はウェーバーと丸山真男を補助線としながら社会構造における正統・異端の諸類型（〇 (orthodoxy)）正統とレガチマシー（legitimacy）正統⁽³⁶⁾を提出したうえで、日本社会における「天皇制」とそれに付随する「神の蒸発過程」を論じ、ここでは西欧における正統と異端の交替が機能しないと述べている。⁽³⁷⁾ これもまた日本における弁証法的思考の不在を指摘したものであり、藤田が『昭和八年』を中心とする転向の状況（『転向の思想史的研究』）で言及する「ズルズルベッタリの状況追従主義」の指摘もこうした日本の思想的風土への批評的な言及であるといえる。柄谷がすでに述べているようにマルクス主義は日本思想史において「他者」

として機能したのである。⁽³⁸⁾

マルクス主義と日本の歴史記述の対応については、磯前順一「暗い時代に——石母田正『中世的世界の形成』と戦後日本の歴史学——」において石母田のマルクス主義受容と三木清の影響を論じており、永田博志、三枝博音、服部之総らの戦前の日本思想史研究とマルクス主義についても同書赤澤史朗「マルクス主義と日本思想史研究」論文に指摘がある。⁽³⁹⁾ こうしたマルクス主義的なヘーゲル受容への違和として吉本の理論は構築されたものであり、吉本はマルクスのな弁証法的思考をヘーゲルのみならず『マチュウ書』にまで遡り再検証したうえで、さらには遠山啓の数学論をも視野に入れて理論を構築している。⁽⁴⁰⁾ 吉本の弁証法的思考については鹿島茂の肯定的評価もあるが、⁽⁴¹⁾ 吉本へのヘーゲルの影響だけでなくより広範な背景を見る必要がある。

三 英語圏の文学・哲学研究との対応 スロチャワーとケネス・バーク

本稿は、日本での文学史記述全体の再検討を指すものだが、こうした検討で新たに浮かび上がった問題は英語圏の同時代の文学・哲学の研究状況の再構成とそうした状況の日本との対応関係である。

ハリー・スロチャワー (Harry Slochower) の *Literature and philosophy between two World Wars* (1945) には第一次大戦後から一九三〇年代のファシズムに至る西欧の文学と思想状況が活写されており、その背後にはケネス・バークの哲学がある。スロチャ

ワウの研究については由良君美の一九七〇年代での紹介——「二ユースクール、バーク、スロチャワー」(『世界』一九七二・二)——や後述のスタンレー・ハイマンの著作の邦訳⁽⁴²⁾を除いて日本では全くと言っていいほど知られていないが、スロチャワーには Mythopoeis : mythic patterns in the literary classics (1970) という神話的元型と文学の比較研究があり、そこではアウエルバッハの研究が明白に意識されており、両者ともに亡命者知識人であるという共通項も存在している。⁽⁴³⁾

スロチャワーは前掲書の中で第一次大戦の衝撃を「不完全さ」をキーワードとすることで語り起こしている。スロワチャーはルネサンスによる中世からの切断を超越論的二元論から別の二元論への移行とみなしており、具体的には「商品から芸術や哲学が分離」したことであり、モダニズムの発生も「物質的汚染から精神を救うというテーマ」|| 「作家の疎外」「テクノロジーの非人間化」と密接なかかわりがあるとされる。⁽⁴⁴⁾

さらに、第一次大戦において全ての政治的倫理的基準の崩壊が起こり、それは哲学・文学が発する危機のシグナルであったとし、スロチャワーはそれを科学におけるユークリッド哲学への疑いと並行したものとしてとらえている。「疑念・偶然・不確実性・無法が支配している戦争文化」が人格の空虚な人間化、統一性の喪失、ファシズムの席捲を招くとされ、「非理想的な時代に理想を描く」という点で、ニーチェの重要性が指摘される。⁽⁴⁵⁾

論理実証主義と形而上学はどちらも「行動する過程、弁証法的なオーバーラップ (dialectic overlaps)」に対処できないとみなされ、マルクス・フロイト的分析、さらには、その観点から見たバーク

の哲学の重要性が説かれる。

最後にスロチャワーは、アリストテレスが「カタルシス」と呼び、中世人が「救済」と呼び、我々現代人が「統合」と呼ぶもの——偉大な古典文学の登場人物の「認識」の瞬間——登場人物のジレンマの意味と仲間や世界に対する本当の関係を理解する瞬間 (p.380) の重要性が語られ、それを最後の市民が到達すべき「弁証法的ヒューマニズム」であるとしている。⁽⁴⁶⁾

スロチャワーがバークの影響を受けていることについては、すでに前述の『ケネス・バークの方法』でスタンレー・ハイマンが指摘しているが⁽⁴⁷⁾、この論点は今一度顧みられる必要がある。『文学形式の哲学』(一九四一)、『動機の文法』(一九四五)、『動機の修辞学』(一九五〇)といった著作で知られるバークの哲学については邦訳者の一人である森常治の著作をはじめ、日本でもいくつもの研究がある。⁽⁴⁸⁾すでに八〇年代において富山太佳夫が「交換の詩学——ケネス・バーク」においてその全体像を検証している。⁽⁴⁹⁾

富山はバークの perspective by incongruity (視座の変換) を自動化と現前化を自在に切り替える一種の「道化」的な概念とみなし、そこからバークの「隠喩」概念とその理論的ダイナミズムを検証している。⁽⁵⁰⁾さらに、富山は「修辞学から歴史哲学へ」で、バークの理論をヘイドン・ホワイトの『メタヒストリー』に接続し、修辞学と歴史記述との関係を論じている。⁽⁵¹⁾

また、フレドリック・ジェイムソンはイデオロギー批評の観点からバークの批評を論じ、象徴的行為の理論が言語の優位性を論じる現在の論調を先取りしながらも、最終的に象徴的行為の分析から社会的、歴史的、政治的地平を排除してしまっており、テク

ストとサブテクストの概念操作が十分でない」と述べている。⁽⁵²⁾ ジェイムソンは『政治的無意識』でもバークの象徴行為論を援用しており、明白な影響関係が存在する。⁽⁵³⁾

近年では仲西満貴典がバークの *perspective by incongruity* を「提喻」の観点から論じそこに「弁証法的」発想を認めたくえで、ミシェル・ド・セルトーや後期フーコーへとつなげたレトリックの観点から見た近代知の再考のビジョンを提出している。⁽⁵⁴⁾

バークのドラマティズムについては前掲の森の仕事のほか、社会学のシンボリック相互作用論との比較の論点から論じた船津衛の検証があり、バークの影響は単なるアメリカ思想史の文脈を超えて重要である。⁽⁵⁵⁾

アメリカの分析哲学の系譜については、ルイス・メナンド『メタフィジカル・クラブ——米国一〇〇年の精神史』に詳しく、オバマの政治理念にプラグマティズムの影響を読む『オバマを読む』といった著作もあるなど、この思想的問題は広大な視野を持っている。⁽⁵⁶⁾ スロチャワーおよびバークとアウエルバッハの両者の仕事を検討することで、従来のアメリカ思想史・文学史研究の空白を埋めることが可能となる。こうした検討はサイドやジェイムソンの研究を育んだアメリカの戦後の思想的風土を見直すことにもつながりうる。⁽⁵⁷⁾

ケネス・バークの哲学はいわば行動と言語（象徴）との結合であるが、柄谷行人は江藤の『作家は行動する』に触れながら江藤と同時代に沢田允茂が言語を行動の観点からとらえていたとしている。⁽⁵⁸⁾ ここで問題となるのはプラグマティズムの日本での展開である。

沢田は『現代における哲学と論理』の中で科学理論と形式論理学の観点から弁証法を検証し、「弁証法的説明は社会や人間の生成変化の説明に対しては実証的、科学的な例を挙げ得るのに反して、物体の運動のごとき物理現象の説明に関しては実証できる科学的な記述が不可能であり、単に考え方、または概念規定というだけの説得力しか持っていない」と批判している。⁽⁵⁹⁾

沢田の研究のように、江藤の仕事と同時代に分析哲学を日本で受容紹介した研究者は多く存在し、その中にはマルクス主義と分析哲学を接合しようとした中村秀吉、上山春平のような研究者も含まれている。⁽⁶⁰⁾

中村は『科学論の基礎 分析的方法とマルクス主義』で弁証法を分析哲学の立場から批判的に論じており、上山は『弁証法の系譜』でマルクス主義と論理実証主義の歴史と論理を検討した後、ヘーゲルとパースの理論的共通性を指摘している。⁽⁶¹⁾

またこうした文脈からはエルンスト・マッハをマルクス主義に接続した廣松渉のような哲学者、論理実証主義を受容しつつ弁証法的思考を批判し独自の社会科学の体系を作り上げた吉田民人のような社会学者も視野に入る。⁽⁶²⁾ 戦後、社会科学や哲学の分野で行われたプラグマティズム・分析哲学の立場からの弁証法批判が一貫して行われていたことを見逃すべきではない。これはバークやスロチャワーの研究が由良や富山の紹介にもかかわらず十分に展開されなかったという論点、つまり弁証法のみならずプラグマティズムもまた日本では不在であったその理由を本稿は提起することになる。⁽⁶³⁾

沢田の論で特徴的なのは当時のソ連などの議論で行われていた

サイバネステイックを弁証法理解と社会変革に応用するという発想を新しい動向として記していることだが、⁽⁶⁴⁾ 当時のソ連やチリでのサイバネステイックによる社会変革の試みの帰趨が見え、⁽⁶⁵⁾ また現在中国で「電腦社会主義」(矢吹晋)と名指される動きがあり、それとは独立して「宇宙技芸」というサイバネステイックをふくむ西洋哲学と科学技術を東洋哲学と接続しようとするユク・ホイの仕事が登場している現在において、⁽⁶⁶⁾ プラグマティズムおよびサイバネステイックの論理と文学との接続、さらには社会との対応をどのように考えるかは、沢田の論の今から見ればやや楽天的な論述を踏まえてもなお重い課題であるといえよう。

ここで付け加えておくべきなのはエルンスト・ブロッホの位置づけである。スロチャワーにおいて重要な位置を占めるブロッホだが (Literature and philosophy between two World Wars の結論部分ではブロッホとバークが参考文献として挙げられている⁽⁶⁷⁾)、単なるマルクス主義者にとどまらない「未来の哲学者」としてのブロッホについては、⁽⁶⁸⁾ 的場昭弘や植村邦彦がスピノザやマルクスとの比較で論じている。吉田治代は近年の海外のブロッホ研究をふまえて、⁽⁶⁹⁾ 普遍化の戦略と差異化の戦略を使い分け「るブロッホの「断片的な理論」は、普遍性の土着性との緊張関係のなかで機能しており、そこに植民地主義やファシズムをもにらんだ「多元的な宇宙」論をみている。こうしたブロッホの戦略はサイドの「世俗的批評」とも交錯するものである。

先に、ジェイムソンのバーク理解を確認したが、ブロッホとフレデリック・ジェイムソンとの関係もまた見落とすことは出来ない。一つ例を挙げれば、『政治的無意識』では魔術的物語の解釈

の際にブロッホへの言及があり、ブロッホとノースロップ・フライが二重写しになされている (p.130)。ジェイムソンにはサルトルやルカーチを論じた『弁証法的批評の冒険』のほか、ヘーゲル哲学を論じた『ヘーゲル変奏』があり、弁証法的思考はジェイムソンにおいて一貫した主題であり続けている。しかし、それに加えて、ブロッホやアウエルバッハへの眼差しもジェイムソンには存在するのであり、ブロッホへの問いかけは後年の『未来の考古学』に結実する。⁽⁷⁰⁾

マルクスとフロイトを結合させ、ブロッホとバークを理論的参照点としたスロチャワーの研究をジェイムソンに先駆けたものとしてとらえることができ、そうした視座でニュークリティシズム以後の文学研究とジェイムソンの理論的探究の位置づけも見直されるべきだろう。

バークと当時のアメリカの人文科学研究については、秋元秀紀に一九三〇年代の知識人の動向を調査した研究があり、⁽⁷¹⁾ バークとマルコム・カウリーの交流については吉田朋正による検討がある。⁽⁷²⁾ ただ、この二人の詳細な研究にもスロワチャーの名は言及がなく、日本での英米文学研究史の空白を埋めるという点でも今後も引き続き検証を続ける必要がある。⁽⁷³⁾

四 弁証法の「外部」——〈アジア〉、そして原爆文学——

弁証法的な論理がいわゆる分析哲学が考える形式論理に従わないという批判は前節で述べたとおりだが、ここからは弁証法にとって外部として機能する二つの論点について述べたい。

丹生谷貴志「歴史の〈外部〉」はヘーゲル『世界史の哲学講義』におけるアジア表象における決定的な「亀裂」に触れている。丹生谷はヘーゲルがペルシャからインドへの間に切断を行っていることを指摘したのち、インド以東の「オリエント」がヘーゲルの哲学史から「排除」されてしまっており、その「排除」された「オリエント」は弁証法的な「否定」の関係性に包含できず、「外部」の表象として機能すると述べている。⁽⁷⁴⁾ 丹生谷はこうした排除の構造はオリエントをイスラム世界のみ限定し、フーコーの仕事を図式的にとらえた（「エノONSE」の問題を等閑視した）サイードにも存在するとしている。⁽⁷⁵⁾ 同様の批判を鈴木規夫も述べており、鈴木はサイードに「視覚認識」問題へのアプローチの不十分性」という問題点がありそれは「サイードが分析の対象としたテクストは、すでに科学的言語が〈観察〉という視覚を従属させる構造の構成をほぼ整えた後に生みだされている」ことから来していること、サイードを乗り越えるためにはフーコー『レーモンルーセル』に学ぶことで「反視覚的言説の具現形態」において〈構造〉の問題を解決する必要性を述べている。⁽⁷⁶⁾

アウエルバツハがトルコで『ミメーシス』に結実する仕事を行っていたこともサイードを経由して東西の比較文明・比較思想史的研究へと至る展望として重要であるが、カダール・コムクはレヴィンの研究とサイードのアウエルバツハ批判（『人文学と批評の使命』を批判的に踏まえつつ、アウエルバツハのダンテ論における「イスラム」の不在とサイードの言う「世俗的批評」が一九三〇―四〇年代のトルコで現実的な可能性としてあり得たこと、そしてアウエルバツハが最終的にそれに背を向けたことと述べて

いる。⁽⁷⁷⁾

また、エミリー・アプターは『翻訳地帯』でアウエルバツハ『ミメーシス』を生みだしたイスタンブールというトポスとアウエルバツハからサイードが引き継いだ「トランスナショナルな人文主義」について論じている。⁽⁷⁸⁾

アウエルバツハとサイードの盲点はともに彼らにとつての「他者」である（アジア）に存在するのであり、その盲点をいかにして克服するかが問われる必要がある。

日本での弁証法の展開に目を向ければ、郭旻錫『自己否定する主体——一九三〇年代「日本」と「朝鮮」の思想的媒介』（京都大学術出版会）では前半では田辺哲学と韓国の哲学者との対応が、後半では横光や川端の文学と李箱の文学との対応が論じられている。⁽⁷⁹⁾ これは戦前の東アジアで「否定性」の哲学がどのように分節化されたかを示す例であり、⁽⁸⁰⁾ こうした文脈から東アジア世界の問題を「日本文藝史」記述に導入した小西甚一の仕事の意義や「アフリカの段階」⁽⁸¹⁾ を説く吉本の議論も再検証することが可能となる。

ただ、考慮しておくべきなのは、それ自体東アジア世界に属する日本の文学史・思想史記述は「西欧」「近代」をめぐる問いと東アジア世界をめぐる問いを同時に、しかも（ヘーゲル的に言えば）対自的に問わねばならないということである。そうした議論は良くも悪くも「西欧」の枠組みにのっとって行われるため、空転することがしばしばである。⁽⁸²⁾ 東アジアにおいて「日本」「近代」を問うことの困難さは江藤においても吉本においても柄谷、加藤、小西においても意識されている。その問いは彼らが共通して問題

とした漱石に行きつくものであり、ここで江藤が提出した「他者」をめぐる文学史の重要性が出てくる。いわば日本における弁証法の不在は「他者」の不在に集約されるのだといえよう。

そして丹生谷がフーコーを意識しながら注意深く述べているように、ここで問われている〈アジア〉とは実証的に処理できる地理的な領域内の文化や政治のみを指しているのではなく、表象不可能な思考の外部の謂い（まさしく「他者性」である）であるという点が肝要である。⁽⁸³⁾ 文学史・思想史記述はそうした外部を表象しうるのかという新たな問いがここから派生するのであり、先に見たアウエルバツハとサイードの盲点はこうした表象不可能な外部をどのように論じるかという問いへの回答として解かれる必要がある。

歴史記述での表象不可能性をめぐるもう一つの外部、それは原爆表象そのひとつでするカタストロフ表象である。文学史・思想史記述は原爆をはじめとしたカタストロフをどのように表象しうるのかという論点、すでにこの論点はトリート『グラウンド・ゼロを書く』やアウシュビッツと文学をめぐる研究ですでに先鞭がつけられているが、⁽⁸⁴⁾ 先に論じた日本文学史の試みにおいては、加藤の『日本文学史序説』では福永武彦の『死の島』と井伏鱒二『黒い雨』が論じられている。小西の『日本文藝史』でも井伏の『黒い雨』が論じられているが、それほど重きを置かれているわけではない。吉本が原爆表象に徹底して冷淡であったのは拙稿で述べたとおりである（しかしながら吉本に「死後と未生以前を往還することを可能にする」視線があった——「世界視線」——ことも拙稿で触れている）。⁽⁸⁵⁾ ただ江藤淳に関しては『神話の克服』に次の

ような一節があることを付け加えておくべきだろう。

自然科学が、原子力エネルギーを開放したように、この「寓話」である世界は、人間の内部に潜在している非合理的なエネルギーを今にも解放しようとしているといっている。いま、まさに世界が奇妙な平面的な、有機的なアメーバ状の生きものに變化して不定型な自己運動をおこない、人間の輪郭は、ある粘着な力のなかに解消せられようとしている。⁽⁸⁶⁾

また、丸山が広島での原爆体験者であったことを考慮する必要がある。一九六九年の中国新聞のインタビューで丸山は従軍先の宇品で被爆し、多くの被爆者の姿を目にした経験に触れている。⁽⁸⁷⁾ さらには家永が『ヒロシマナガサキ原爆写真・絵画集成』『日本の原爆記録』の編集委員であったことを改めて想起するべきであろう。⁽⁸⁸⁾ 彼ら思想史家の弁証法的思考の根底には原爆への問いが存在しており、その意味で表象不可能性への問いを抱えたものなのである（原爆は人類にとって自らが産出したものであると同時に究極の他者そのものだろう）。

そしてバークとスロチャワの紹介者である由良君美がジョルジュ・スタイナー『言語と沈黙』の邦訳者の一人でもあったこともまた確認しておかなければならない。⁽⁸⁹⁾ 『グラウンド・ゼロを書く』の著者ジョン・W・トリートもスタイナーの議論を受けて原爆文学を論じているが、トリートは原爆文学と現実社会との関係をサイードの「世俗性」を例に挙げて論じている。⁽⁹⁰⁾ 「世俗的批評」・「弁証法」・「原爆文学」はこのように交錯しうるのである。

拙稿で原爆文学研究と中動態についての議論を行ったが⁽⁹¹⁾、この観点から注目されるのは、バークの中動態へのいち早い（恐らく思想家としてもっとも早い時期の）着目である。『文学形式の哲学』付録につけられた書評での一文においてバークは次のように述べている。

この千七百頁余りの大著の主旨を要領よく伝えてくれるような文章を探した結果、筆者は「中間態」の観念に突き当たった。

ミドルヴォイス
中間態（文法）

この動詞形態では主語は行為者であると同時に行為の目的として提出される。つまり行為者が行う行為は行為者のために行われるのである。

換言すればミードの行動の哲学は主体と客体の一体化という理想主義的関心から始まるのである。「自我」の観念が中軸にあり、「自我」という語それ自体が再帰的に使われている。⁽⁹²⁾

ここでバークは「シンボリック相互行為論」の始祖の一人であるハーバード・ミードを「中動態」と重ねて論じている。そして再帰性の問題に触れている点ではこの論述は弁証法にもまたシステム論的思考にもつながりうるものである。⁽⁹³⁾ 弁証法とシステム論的思考の接点について、大澤真幸に興味深い指摘がある。

ルーマンの理論は…ヘーゲルの弁証法を裏返しているのではあ

る。ヘーゲルにおいては（少なくとも教科書的に解釈されヘーゲルにおいては）、内的で必然的な「本質」が、つまり大文字の「理念」が、現象のうちに自分自身を外化する。現象自体は、偶有的なものである。したがってヘーゲルの弁証法に関しては、われわれは、こう解釈しなくてはならないことになる。さまざまな偶有的な現象という仮面をかぶっているのは、必然的な理念である、と。ルーマンのシステム理論では逆である。必然性を帯びて現れていることも、実は偶有的である。必然性こそが仮面であって、その実態は偶有性の方にある。⁽⁹⁴⁾

「偶有性」は「そうでもありえたかもしれない」という論理学の様相の一つだが、「偶有性」をめぐる位置づけがルーマンのシステム論とヘーゲル弁証法では反対になっているというのが大澤の指摘である。

この「偶有性」をめぐる主題を「様態」をめぐる議論として展開したのがスピノザである。⁽⁹⁵⁾ 工藤喜作の整理にあるように⁽⁹⁶⁾、スピノザは「様態」を「偶有性」の意味で使用しており、それは「神即自然」（すなわち「世界」）の無限に変化し運動を繰り返す存在様そのものであり、スピノザの「コナトウス」（「運動の誘因或は刺激としての運動」）へとつながっている。

丹生谷貴志はピエール・マシユレとアントニオ・ネグリのスピノザ論を念頭に置きながら、ヘーゲルの場合と異なり、スピノザで真に問題となっているのは、無限の様態である「世界」と同一性である「神」とが無媒介に接続された結果、「神」が「蒸発」するという事態であると述べている。⁽⁹⁷⁾（興味深いのはヘーゲルがス

スピノザを論難する際に「東洋の世界観」（つまり思考を攪乱し表象不可能なものとしての〈アジア〉）を引き合いに出していることである⁽⁹⁸⁾。

拙稿でスピノザ哲学と田辺哲学を接続し、それを原爆文学研究に応用する可能性を示唆したが⁽⁹⁹⁾、この観点から見たとき興味深いのはバークが『動機の文法』でスピノザに再三言及していることである⁽¹⁰⁰⁾。バークは動機をスピノザの「自己原因」を同様のものとして説明しており（p74）、「行為者」はスピノザの「コナトウス」に対応している（p163）。さらにバークは邦訳の p154-170 にわたってスピノザ論を展開している。バーク理論の根幹にスピノザが位置しているといっていいただろう。

拙稿で以前「中動態」と原爆表象について議論し、「中動態」における「此者性」が確定記述に回収されない過剰さを含み、また、被爆者の記憶においてはすべての事象が一般化・形式化できない、過剰な「此者性」＝「この」性」を帯びたものとして想起されると指摘した⁽¹⁰¹⁾。驚くべきことに、バークは「此者性」についても触れており、個物や人間の性質を固有性を認めつつ多様に評価するための概念として理解している⁽¹⁰²⁾。バークのアプローチは「神話を記号の束に還元する」という点では記号論的であり、その点を富山と山口は八〇年代に評価したのだが、バークにおいては記号論的思考と究極の単独性である「此者性」が共存しているのである。

従来の哲学や哲学を名詞や概念⁽¹⁰⁴⁾だけではなく動詞に着目して読み替えている点（『意味の論理学』⁽¹⁰⁴⁾）、それを社会構造の分析や文学作品の読解に応用している点（『ミル・プラトー』）、「動物性」や「生成の哲学」の論点（『ミル・プラトー』）、憲法への考察（『構

成的権力』⁽¹⁰⁵⁾）などバークの哲学はドゥルーズ・ガタリやアントニオ・ネグリにはるかに先駆しているともいえる。バーク理論の根幹にスピノザが存在していることから考えればネグリ・ドゥルーズとの類縁性もまたうなずけるところである。

すでにいくつかの研究でバークとドゥルーズの接続は行われており、アブラム・アンダースはバークとドゥルーズを比較した論文で、ドゥルーズ『批評と臨床』を援用しつつ、文化の「治療」という観点から、ドゥルーズの「マイナー文学」（言語の「吃音」化）も含めたより解体的かつ創造的な「文学」像の提起を読み取っている⁽¹⁰⁶⁾。

さらには、ドゥルーズ哲学とプラグマティズムの思惟との比較検討が始まりつつある現在⁽¹⁰⁷⁾、こうした成果を中動態研究やスロチャワの仕事を經由した文学研究に接続することでより豊饒な成果が期待できる。それはドゥルーズ哲学をも視野に入れた「マイナー文学」、そして原爆表象の「此者性」をアウエルバッハに組み入れることにつながるのである。

ボブ・プラントはワイトゲンシュタインの哲学を「治療としての哲学」だとしているが⁽¹⁰⁸⁾、遠藤知己は十七・十八世紀イギリス経験論の系譜に「治療的な言語理論」の発想を見出している。

言語实在論の傾斜の裏面のようにして残り続ける言語の治療という唯名論的発想、公共的言説の影として思考され続ける私的言語の可能性の諸問題。これらの主題はワイトゲンシュタイン以降の分析哲学の流れと驚くほど通底性がある。ある意味で分析哲学的な思考形式は、カント的な屈折を受けた経

験論なのだろう。(109)

イギリス哲学のこのような側面と森滝史郎との関係はすでに論じたが、⁽¹¹⁰⁾この論点を先に見た「マイナー文学」「此者性」の問題を視野に入れ改めて再考することが可能となる。ドウルーズが「此者性」をリゾームに接続していることの意味、そしてジャクソン・ポロックとヴァージニア・ウルフという英米の芸術家を「此者性」の例として挙げていることの意味も、バークやプラグマティズムとの関係で論じなおす必要があるだろう。⁽¹¹¹⁾

これは一見、弁証法への問いから外れているようにみえるがそうではない。バークは『動機の文法』においてスピノザに依拠しつつ、ヘーゲル的な弁証法にとどまらないより多角的な「弁証法」の可能性を問うているからである。⁽¹¹²⁾ここから構想されなければならぬのは、ヘーゲル・マルクスの弁証法だけではない、バークの言う多様な「弁証法」とドウルーズⅡガタリ、分析哲学をも接続させた視座から見た文学史・思想史記述、「此者性」「偶有性」〈アジア〉を表象しうる新たな文学史・思想史記述の可能性である。⁽¹¹³⁾

以上のような原爆文学をはじめとしたカラストロフ表象を基軸にしつつ『ミメーシス』を読み直す試みは、四方田犬彦が指摘する『オデュッセイ』の後半部分、二十世紀の内戦と殺戮の経験を先取りしたともいえるべき殺傷の場面を果たしてどのように受け止め解釈するかという問いを喚起する。⁽¹¹⁴⁾

このような『ミメーシス』再読がもたらす帰結は決して容易な試みではない。拙稿で論じたように、原爆文学における「此者性」

の表象とは以下のようなものにならざるを得ないからである。

被爆者の記憶を「自由間接主観表現」によってそのまま自らの主観に移し替えるということは、「中動態」がもたらす過剰な「此者性」∥「この」性」を帯びたものとして想起される記憶をそのまま自己の視野の中に差し込むことを意味する。被爆者の、あるいは他の「虐殺」の記憶に開かれるというのは、「画面全体の統一が解体されて、各要素が並列的に振動しているような」「言語表現の統語論的総合や階層的秩序を宙吊りにする」様な状態が常時続くということでもある。⁽¹¹⁵⁾

こうした表象を可能にする文学的試みとして拙稿ではドストエフスキーを補助線にして論じ、マルセル・デュシャンのアンフラマンズ (infra-mince) ∥ 極薄という概念を日常性の、それでいて単独的な(まさに「此者性」)ありようを表象するものとして導入した。⁽¹¹⁶⁾この「アンフラマンズ」を四方田犬彦は「つねに関係のなかで、事物と事物の廻りあいの中で偶然に生じること」ととらえているが、これはすなわち「偶有性」に他ならない。日常の無数の「偶有性」と「虐殺」の記憶の「此者性」が区別されることなく過剰に露出しつづける、そうした文学的表象を記述する際に求められる弁証法は、丹生谷貴志がヘルダーリンに触れて言う「直接性の弁証法」「狂気の弁証法」(丹生谷はヘルダーリンの「直接性の弁証法」の説明に「器官なき身体」を例に出している)に近いものなのかもしれない。⁽¹¹⁸⁾

虐殺の記憶と始原の記憶を保存しつつ、日常の、無限の偶有性

へと開かれた文学的表象、それを可能にするものとしての『オデ ユッセイ』の読解を通じて、『ユリシーズ』『フィネガンズウエイ ク』のジョイスの試みのごとく、円環は再び回るのであり、そこから新たな新時代の『ミメーシス』が書き始められなければならない。

注

1 近年で本稿と類似した問題意識を持った研究として前野佳彦『中世的修羅と死生の弁証法』（法政大学出版局 二〇一〇）があり、前野はアウエルバツハ『ミメーシス』を参照しながら（p.）文学も含めた日本中世史を分析している。最近の日本文学史記述の試みとして木村洋『変革する文体 もう一つの日本文学史』（名古屋大学出版会 二〇二二）、山本良『小説の維新史——小説はいかにして明治維新を生き延びたか』（風間書房 二〇〇五）。

2 拙稿「戦略としてのロマン主義記述——江藤淳と橋川文三を中心として——」（『三重大学日本語学』）、同「ムーゼルマン」の傍らにおける「倫理」と「連帯」は「喩」として表象可能か——「現代詩論史」の視角から吉本隆明『「反核」異論』を読む——（『原爆文学研究』一八 二〇一九・一二）同「昭和一〇年代における「浪漫主義的言明」の諸相」（『近代の夢と知性』翰林書房 二〇〇〇）。
3 無論、江藤淳『リアリズムの源流』（河出書房新社 一九八九）の様な著作は存在する。また英米の表象史研究の立場からのリアリズム研究の視座として高山宏の見解（「十八世紀に「小説」と呼ばれるようになる不思議な「ディスクール」の形式は、十七世紀後半の「世界」ないし「真理」「真実」を「リアルに」「表象」したいとい

う言語運動の一環」（『ブック・カーニヴァル』国民文化社 p.11）、および、十八世紀・十九世紀の観相学と小説との関係について遠藤知己『情念・感情・顔』（以文社 二〇一六）。さらに言説研究の立場からのものとして榎並・三橋の仕事（『細民屈と博覧会』JIC出版 一九八九）があり、近年では同時代の新聞などとの対応を見た山田俊治の研究（『書くこと』の十九世紀明治』岩波書店 二〇二三）もある。

4 日本の批評史に関しては、谷沢永一による明治大正期の文芸批評の検討（『明治期の文芸評論』（八木書店 一九七一）、『大正期の文芸評論』（中公文庫 一九九〇）、柄谷行人らによる昭和批評史の検討（『近代日本の批評 昭和編 上下』講談社文芸文庫 一九九七）、近年では大澤聡『定本 批評メディア史』（岩波現代文庫 二〇二四）などがある。

5 エドワード・サイド『世界・テキスト・批評家』（法政大学出版局 一九九五）。

6 ゴウリ・ヴィシユワナータン『異議申し立てとしての宗教』（みすず書房 二〇一八）。

7 サイドは養子縁組的な社会関係の分析としてルカーチ『歴史と階級意識』を例に挙げている。この点について岩田賢介「エドワード・サイドの思想におけるアフィリエーション ジェントルマン・小説・知識人」（『岩手大学大学院人文社会科学研究所』二〇〇七）。

8 齋藤一「中動態、原爆文学、ウルフ——柳瀬（二〇二二）への応答——」（日本ヴァージニア・ウルフ協会 第一二七回例会 二〇二三・七・一六 於一橋大学）。

- 9 ダマソ・フェレイロ・ポッセ「芥川龍之介の蔵書から浮かび上がる古代ギリシア文学」『プロピレア』二六（二〇二〇）、またダマソの博士論文（「芥川龍之介における西洋古典の受容——「神神の微笑」と「文芸的な、余りに文芸的な」を中心に——」広島大学大学院文学研究科博士論文 二〇一八）。
- 10 野上はブルフィンチ『ギリシア・ローマ神話』（岩波文庫）の邦訳者である。田村道美「野上弥生子訳『ギリシア・ローマ神話』と「古代ギリシア祭文」（香川大学教育学部研究報告 第I部 一九九七）。
- 11 なお、この観点は岡和田晃より示唆を受けた。
- 12 私は現在、齋藤、ダマソ、そして日本中世文学研究者で小西甚一の教えを受けた内田康の三名と文学史記述をめぐる研究会を行なっている。本稿はその研究会での三氏の発言に様々な示唆を得ている。
- 13 加藤周一『日本文学史序説』（ちくま学芸文庫 一九九九）。ちくま文庫版は英訳と対応し、単行本版（一九八〇）に加筆された戦後文学への考察があり、引用に際してはこちらを採用する。
- 14 柄谷行人『日本精神分析』（文藝春秋 二〇〇二）。
- 15 拙稿「『日本語』文学における「他者性」表象の可能性について——台湾人作家の作品での文字表記を中心にして——」（『敍説』IV・二二〇二四）。
- 16 柄谷行人『日本精神分析』p71。
- 17 柄谷前掲書。
- 18 加藤周一・ドナルド・キーン・小西甚一・芳賀徹「第一〇回国際日本文学研究集会シンポジウム 日本文学史について」（『国際日本文学研究集会会議録』 国文学研究資料館 一〇号 一九八七 p182）。本資料については内田康に示唆を受けた。
- 19 家永三郎『津田左右吉の思想史的研究』（岩波書店 一九九五）。
- 20 小西『日本文学史I』（講談社 一九八五 p174）。
- 21 小西『日本文学史II』（講談社 一九八五）。
- 22 江藤『作家は行動する』（引用は講談社刊『江藤淳著作集』第五巻 p66）。
- 23 『作家は行動する』p78。
- 24 江藤の批評については拙稿「戦略としてのロマン主義記述——江藤淳と橋川文三を中心として——」（『三重大学日本文学』二五二〇一四）。なおこの部分はこの拙稿と一部内容が重複している。
- 25 菅野昭正「不毛の非論理——江藤淳氏への疑問——」（『批評』五九年新緑号 一九五九）。
- 26 菅野論文 p96-111。
- 27 前掲拙稿「戦略としてのロマン主義記述」。
- 28 江藤『作家は行動する』、『リアリズムの源流』参照。
- 29 引用は『マチウ書試論』（『吉本隆明全集四』 晶文社 二〇一四 p207）。
- 30 合田正人『吉本隆明と柄谷行人』（PHP新書 二〇一一）。
- 31 吉本隆明『自立の思想的拠点』（徳間書店 一九六六 p105）。
- 32 合田正人前掲書。
- 33 樋口陽一『加藤周一と丸山眞男 日本近代の「知」と「個人」』（平凡社 二〇一四）、荻部直『丸山眞男』（岩波新書 二〇〇六）。
- 34 今井弘道『丸山眞男研究序説「弁証法的な全体主義」から「八・一五革命説」へ』（風行社 二〇〇四）。
- 35 野口武彦『王道と革命の間 日本思想と孟子問題』（筑摩書房 一九八六）。

- 35 家永三郎『田辺元の思想史的研究』『日本思想史における否定の論理の発達』（新泉社 一九七三）。家永の仕事の全体像については小田直寿『家永三郎の思想史的研究』（日本評論社 二〇二四）。
- 36 丸山眞男『正統と異端Ⅰ』（『丸山眞男集別冊第四巻』岩波書店 二〇一八）。丸山の議論に先行するものとして堀米庸三『正統と異端ヨーロッパ精神の底流』（中央公論社 一九六四）。丸山の正統論を用いた研究として安丸良夫『近代天皇像の形成』（岩波書店 一九九二）。丸山の正統論への批判として森本あんり『異端の時代』（岩波新書 二〇一八）。日本文学者の仕事として河上徹太郎『異端と正統』（文藝春秋新社 一九六〇）。こうした日本の正統と異端論と前述のヴィシユワナータン、あるいはピエール・ルジャンドルの「ドグマ人類学」（『ドグマ人類学講義総説』平凡社 二〇〇三）との交錯も課題の一つである。
- 37 藤田省三『異端論断章』（みすず書房）。
- 38 柄谷行人「近代日本の批評 昭和前期Ⅰ」（『近代批評の批評Ⅰ 昭和編上』講談社文芸文庫 一九九七）。
- 39 磯前順一・ハリイ・D・ハルトウーニアン編『マルクス主義という経験——一九三〇・四〇年代日本の歴史学』（青木書店 二〇〇八）。
- 40 吉本隆明「詩と科学との問題」（初出『詩文化』一九四九・二その後『吉本隆明全集一』晶文社 二〇一四に所収）。
- 41 鹿島茂『思考の技術論』（平凡社 二〇二二）。
- 42 スタンレー・ハイマン『ケネス・バークの方法』（大修館書店 一九七四 p55）。
- 43 亡命者としてのアウエルバツハについては、ハリイ・レヴィン「アメリカにおける二人のロマンリスト シュピッツァーとアウエルバツハ」（『亡命の現代史』人文学者・芸術家』（みすず書房 一九七三）。同論文ではアウエルバツハが初期にヴィーコのテクストをドイツ語訳しており、アウエルバツハの晩年の著作 *Literary language & its public in late Latin antiquity and in the Middle Ages* にヴィーコの歴史主義についてのコメントがあることが記されている。
- 44 Harry Slochower *Literature and philosophy between two World Wars, 1945, reprint Citadel Press 1964, introduction VIII*。スロチャワールの研究についてはエレアザール・メレチンスキー『神話の詩学』（水声社 二〇〇七）とウィリアム・ライター『神話と文学』（紀伊国屋書店 一九七六）にそれぞれ言及がある（『神話の詩学』については内田康の教唆を得た）。
- 45 スロチャワー前掲書 *introduction* XVII。スロチャワールのマン研究者としての側面はクラウス・ハープレヒト『トーマス・マン物語Ⅱ 亡命時代のトーマス・マン』（三元社 二〇〇七）、『トーマス・マン日記』（紀伊国屋書店 一九八五）に言及がある（マンはアメリカ滞在中の日記で幾度もスロワチャーに触れている）。
- 46 スロチャワー前掲書 p380。
- 47 スタンレー・ハイマン『ケネス・バークの方法』（大修館書店 一九七四 p55）。
- 48 森常治『ケネス・バークのロゴロジー』（勁草書房 一九八四）。
- 49 富山太佳夫「交換の詩学——ケネス・バーク」（『テキストの記号論』南雲堂 一九八二）。
- 50 富山前掲論。ウィリアム・ウイルフォード『道化と笏杖』（晶文社 一九八三 p287 翻訳者は高山宏）でもこの *perspective by incongruity* の概念は活用されており、初期の山口昌男がバークに着

眼したのもその理論の「道化」性ゆえだろう（山口昌男『文化の両義性』岩波書店 一九七五 p34-40 p255）。山口は『文化の詩学』（岩波現代選書 一九八三）でもたびたびバークに言及している。

51 富山太佳夫「修辞学から歴史哲学へ」（『テキストの記号論』南雲堂 一九八二）。富山英文学の理論的基礎がすでにこの段階で出来上がっており、そこに由良君美經由のバークが深く関与していることは興味深い。

52 Fredric Jameson *The Symbolic Inference, or, Kenneth Burke and Ideological Analysis, Ideologies of theory verso 2020*。なおこの論には中村による批判（バークがテクストの外部を視野に入れている）がある。中村渉「内なる外」または「外なる内」——ケネス・バークの弁証法的比喩論」（『記号学研究』一〇一九九〇）。

53 フレドリック・ジェイムソン『政治的無意識』（平凡社 一九八九）。

54 中西満貴典『レトリックと哲学 ケネス・バークからミシェル・フーコー』（彩流社 二〇一九）。また、バークの比喩論に弁証法的思考を見る研究として中村渉前掲論。中村は吉本の弁証法的思考の不十分さ（西洋の比喩概念と対応せず否定性の側面が強すぎる）を批判し、バークのアイロニー＝弁証法の理論（perspective by incongruityと結びついたより開放的な理論）でそれを補完している。

55 船津衛「ケネス・バークのドラマティズム」（『人文研究』（大阪市立大学）二九・一〇 一九七七）。バークはミードの影響を受けている。バークへの言及がある船津衛『シンボリック相互作用論』（恒星社厚生閣 一九七六 p60-63）も参照。

56 ルイス・メナンド『メタフィジカル・クラブ——米国一〇〇年の精神史』（みすず書房）ジェイムズ・クロツペンバーグ『オバマを

読む』（岩波書店 2012）。

57 この観点は原爆文学におけるアメリカ側の視点を取った作品、堀田善衛『審判』、小田実『HIROSHIMA』をプラグマティズムの視点で読みなおした時にどのような読解が可能かという問いを誘発する。

58 柄谷前掲論。

59 沢田允茂『現代における哲学と論理 論理的分析と哲学的総合』（岩波書店 一九六五 p141）。

60 植田清次『分析哲学』（紀元社 一九五六）、永井成男『分析哲学』（弘文堂 一九五九）、中村秀吉『科学論の基礎 分析的方法とマルクス主義』（青木書店 一九七〇）、上山春平『弁証法の系譜 マルクス主義とプラグマティズム』（未来社 一九七二）。なお、近年の吉本論も含んだ興味深い検証として鹿島茂『思考の技術論』（平凡社 二〇二三）。弁証法的思考を相対化しようとしたユニークな試みとして李御寧『ジャンケン文明論』（新潮新書 二〇〇五）。

61 中村、上山前掲書。

62 廣松渉『資本論の哲学』（勁草書房 一九八七）、同『弁証法の論理』（青土社 一九八〇）、同『科学哲学』（廣松渉著作集）第三巻（一九九七）。吉田民人『情報と自己組織性の理論』（東京大学出版会 一九九〇）、吉田理論への仮借ない批判として橋爪大三郎『自己組織性と情報の社会学 吉田理論 三部作を論ず』（『社会学評論』四三 一九九二）。

63 この件に関し、鶴見俊輔の仕事をどう位置づけるかという問いも浮上する。鶴見の仕事プラグマティズムとアナキズムの観点から検討したものとして、谷川嘉浩『鶴見俊輔の言葉と倫理——想像力、大衆文化、プラグマティズム』（人文書院 二〇二二）。

- 64 スラーヴァ・ゲローヴィッチ『ニュースピークからサイバーピークへ ソ連における科学・政治・言語』（名古屋大学出版会 二〇二二）、エデン・メディーナ『サイバネティックスの革命家たち アジアンデ時代のチリにおける技術と政治』（青土社 二〇二二）。この論点に関してゲローヴィッチの邦訳者である大黒岳彦の廣松渉から生成AIまでをにらんだ『〈情報的世界観〉の哲学——量子コンピュータ・メタヴァース・生成AI』（青土社 二〇二三）を参照。
- 65 矢吹晋『中国の夢 電腦社会主義の可能性』（花伝社 二〇一八）。
- 66 ユク・ホイ『中国における技術への問い』（ゲンロン 二〇二〇）、同『再帰性と偶然性』（青土社 二〇二二）。
- 67 スロチャワの記念論文集である *Myth Creativity Psychoanalysis: Essays in Honor of Harry Slochower*, Wayne State University Press 1978 は亡命時代の友人だったブロッホの三〇年代に書かれたドイツ語論文が収録されている (*Zur empirischen und philosophischen Erziehung im Erkennen*)。由良君美『みみずく偏書記』（ちくま文庫 二〇二二 p227）も参照。
- 68 的場昭弘『待ち望む力 ブロッホ、スピノザ、ヴェイユ、アーレント、マルクスが語る希望』（晶文社 二〇二三）、植村邦彦『敗北後の思想——ブロッホ、グラムシ、ライヒ』（人文書院 二〇二四）。また、田崎英明『間隙を思考する』（以文社 二〇二四）ではブロッホが重要な参照枠として使用されている。
- 69 吉田治代『ブロッホと「多元的宇宙」』（知泉書館 二〇一一）。
- 70 F・ジェイムソン『弁証法的思考の冒険』、同『ヘーゲル変奏』（青土社 二〇一一）、同『未来の考古学Ⅰ ユートピアという名の欲望』（作品社 二〇一一）。
- 71 秋元秀紀『ニューヨーク知識人の源流 一九三〇年代の政治と文学』（彩流社 二〇〇一）。
- 72 吉田朋正『エピソードカルな構造 〈小説〉的マニエリスムとヒューモアの概念』（彩流社 二〇一八）。
- 73 これは由良君美の高弟だった高山宏と富山太佳夫、四方田犬彦がなぜスロワチャの仕事（特にそのファシズム論）への言及をしなかったのかという問いにもかわる（ただライター『神話と文学』の邦訳者は富山である）。前述のように、スロワチャの仕事は明らかにジェイムソンに先駆するものであり、スロワチャとジェイムソンの間に人的関係があったかについても含め、今後、検討の余地がある（この点については齋藤一との対話に負っている）。
- 74 丹生谷貴志「歴史の〈外部〉」『GS』三「特集 千のアジア」（冬樹社 一九八五）。
- 75 丹生谷前掲論。
- 76 鈴木規夫「〈オリエンタリズム〉の構造と権力——サイドにおける〈視覚認識〉問題における限界——」（鈴木規夫『光の政治哲学 スフラワルディーとモダン』国際書院 二〇〇八）。この点に関する私の見解として拙稿「地域性と文学」への一考察——先行研究を概観しながら展望を考える——（『近代文学試論』六〇 二〇二二・一一）。
- 77 また、コムクはアウエルバッハのイスタンブールでの講義ノート（トルコ語でしか刊行されていない）が彼の著作を補完するとして、一部講義ノートの英訳を収録している。Kader Komuk *East West Mimesis Auerbuch in Turkey*, 2010°。

- 78 エミリー・アプター『翻訳地帯 新しい人文学の批評パラダイムに向けて』（慶應義塾大学出版会 二〇一八）。
- 79 郭旻錫『自己否定する主体——一九三〇年代「日本」と「朝鮮」の思想的媒介』（京都大学術出版会 二〇二三）。郭は今井の丸山・田辺解釈を批判している。
- 80 東アジア全体と京都学派との対応について廖欽彬・伊東貴之編『東アジアにおける哲学の生成と発展 間文化の視点から』（法政大学出版局 二〇二二）。
- 81 吉本隆明『アフリカの段階について』（春秋社 一九九八）。
- 82 稲賀繁美の一連の研究を参照。稲賀繁美「西側」近代性に対する抵抗と「東洋的」沈潜への誘惑と」酒井直樹・磯前順一編『近代の超克』と京都学派——近代性・批判的注釈』（『日本研究』第五四集 国際日本文化研究センター 二〇一七）。
- 83 丹生谷貴志「歴史の〈外部〉」。
- 84 ジョージ・スタイナー『言語と沈黙 上』（せりか書房 一九六九）。スタイナーは同書でホメロスに触れている。一九四五年刊行のスロワチャールの *Literature and philosophy between two World Wars* に原爆についての言及はないが、スロワチャールは同書でユダヤ性に言及しているほか（p229-243）、オーストリアの作家フランツ・ヴェルフエル（Franz Werfel）がオスマントルク帝国のアルメニア人虐殺事件を描いた小説『モーセ山の四十日』（日本文芸社 一九九三）を論じており（p233）、「大虐殺」表象については視野に入っていたといえる。
- 85 拙稿「ムーゼルマン」の傍らにおける「倫理」と「連帯」は「喩」として表象可能か」。
- 86 江藤淳『神話の克服』。
- 87 丸山真男「二十四年目に語る戦争体験」（丸山真男手帖の会『丸山真男話文集』みすず書房 二〇〇八）。この点に触れた研究として苅部直『丸山真男』（岩波新書 二〇〇六）。
- 88 家永三郎『太平洋戦争』（岩波現代文庫 二〇〇二）。
- 89 ヴァン・デル・ポスト『新月の夜』の原爆表象をめぐる由良と高山の確執については高山宏『超人高山宏の作り方』（N T T出版 二〇〇七）、四方田犬彦『先生とわたし』（新潮社 二〇〇七 p144-145）。
- 90 ここでトリートが例に挙げているのは黒古一夫『原爆とことば』（三一書房 一九八三）である。
- 91 拙稿「森瀧市郎研究覚書その二——「中動態の哲学」を経由して原爆文学研究への架橋を試みるためのノート——」（『原爆文学研究』二〇 二〇二二・三）。この論に関しては中動態を基軸にした論が責任の問題を回避してしまい、また作品の実際の言語的な手触りを説明できないのではという批評を菅原潤、岡和田晃の両氏より頂戴した。同様の中動態への批判として稲賀繁美「意志的主体による責任」という〈虚構の必要悪〉「中動態」から社会正義の根幹を問い直す（下）」（『図書新聞』三三三〇九号 二〇一七・七・一）。中動態論と同様の論理を〈中動態の概念を使わずに〉分析した興味深い論として水川敬章「否定性の共同体のために『薬を食う女たち』、『ドラッグ・フェミニズム』、そして、五所純子の書く行為について」（『昭和文学研究』八七 二〇二三）。
- 92 ケネス・バーク『文学形式の哲学』（国文社 一九八三）。
- 93 ユク・ホイ『再帰性と偶然性』での議論をこの論点から再検討することも必要だろう。

- 94 大澤真幸『社会システムの理論』（弘文堂 二〇一五）。
- 95 スピノザの反ヘーゲル主義者としての位置づけはピエール・マシユレ『ヘーゲルかスピノザか』（新評論 一九八六）、アントニオ・ネグリ『野生のアノマリー』（作品社 二〇〇八）。及びそれを受けた丹生谷貴志『野生の異例性』をめぐるノート』（『現代思想』一九八六・七）。
- 96 工藤喜作「自然から社会へ（ホッブスとスピノザの場合）『哲学思想論集』（筑波大学 一一 一九八六）。
- 97 丹生谷『野生の異例性』p119。
- 98 丹生谷前掲論 p120。また、ヘーゲル『哲学史講義 下』（河出書房新社 一九九三 p240）
- 99 拙稿「森滝市郎研究覚書その二——「中動態の哲学」を經由して原爆文学研究への架橋を試みるためのノート——」（『原爆文学研究』二一 二〇二二）。なお田辺の影響下に書かれた石沢要『スピノザ研究』（創文社 一九七七）はスピノザに「実体と属性と様態の交互関係の弁証法的関係」（p133）を認めている。
- 100 ケネス・バーク『動機の文法』。スピノザの影響は森常治前掲書でも取り上げられている。
- 101 拙稿「ムーゼルマン」の傍らにおける「倫理」と「連帯」は「喩」として表象可能か。
- 102 ケネス・バーク『動機の文法』p422。
- 103 山口昌男『文化の両義性』（岩波書店 一九七五 p37）。
- 104 平田公威「意味の論理学」における動詞と時間——ドゥルーズにおけるギョーム言語論の受容について——」（『フランス哲学思想研究』二二 二〇一七）、樋笠勝士「ストア派における「述語」について——ドゥルーズを契機にして」（『学習院大学文学部研究年報』六二 二〇一五）。
- 105 アントニオ・ネグリ『構成的権力 近代のオルタナティブ』（松籟社 一九九九）。なお、ジェイムソンは前掲『未来の考古学Ⅰ』でバークの憲法論に触れている（p438）。
- 106 Abram Anders *Pragmatism by Incongruity: 'Equipment for Living' from Kenneth Burke to Gilles Deleuze*, *The Journal of the Kenneth Burke Society* VOL.7 2011。アンダースはバークが *Permanence and change* でジョイスを論じた箇所を念頭に置きながらそれをドゥルーズの『臨床と批評』の言語論に結び付けている。
- 107 山森裕毅『ジル・ドゥルーズの哲学——超越論的経験論の生成と構造』（人文書院 二〇二三）、ティポートウロシユー「多元主義的〈闘争の技法〉としてのプラグマティズム——ウィリアム・ジェイムズからジャン・ヴァール・ドゥルーズへ」（『思想』二〇一八・一〇）、西川耕平「経験と学習 ドゥルーズとデューイ」（『哲学』一五一 二〇二三）。
- 108 ボブ・ブランド『ワイトゲンシュタインとレヴィナス 倫理的・思想的思想』（三和書籍 二〇一七）、榎野沙央理「自己明晰化としてのワイトゲンシュタイン哲学——治療的解釈を超えて」（千葉大学大学院人文社会科学部研究科二〇一九年度 博士論文）、ワイトゲンシュタインの言語ゲーム論からケアの問題につなぎ、最終章でドストエフスキー『柔和な女』を論じつつ死者とケアの非対称性を論じる埜川修『他者と沈黙——ワイトゲンシュタインからケアの哲学へ』（晃洋書房 二〇二〇）。
- 109 遠藤知己「言説」の経験論的起源（上）」（『思想』二〇〇〇・六

- p70)。
- 110 拙稿「森瀧市郎研究覚書——バトラー研究と日本倫理思想との比較を中心に——」(『原爆文学研究』一九二〇二〇)。
- 111 ジル・ドウルーズ&フェリックス・ガタリ『ミル・プラトー』(河出書房新社 一九九六)。
- 112 ケネス・バーク『動機の文法』。批判的実在論の立場からヘーゲル・マルクスの弁証法を再検証したものととしてロイ・バスガー『弁証法』(作品社 二〇一五)。
- 113 偶然性の観点から見た文学史記述として加藤夢三『合理的なものの詩学——近現代日本文学と理論物理学の邂逅』(ひつじ書房 二〇一九)。
- 114 四方田犬彦『オデュッセウスの帰還』(自由国民社 一九九六)。
- 115 拙稿「『大審問官』と『原爆文学』——核時代における権力表象と対抗表象に関するノート——」(『原爆文学研究』二二二〇二二)。
- 116 前掲拙稿「大審問官」。
- 117 四方田犬彦『磨滅の賦』(筑摩書房 二〇〇三)。
- 118 丹生谷貴志「直接性の弁証法——ヘーゲルとヘルダーリン」(『女と男と帝国と』青土社 二〇〇〇)。